

高知で暮らしてみる

公文 俊平

傘寿を目前にして、余生をどう送ろうかと考えているうちに、故郷に帰ってみたくなった。といつても妻は東北出身なので、言葉を含めて適応がむずかしいかもしれない。で、とりあえず試しにしばらく住んでみることにした。

従兄弟や伊野部さんのついで不動産屋をまわり、農人町に、ここならという賃貸しマンションを見つけた。茶園場電停から三分、堀川沿いの二階だての二階である。堀川ごしに目の前にホテル日航があり、その少し西には高級マンションのトップワンがある。これならいい目印になるので、道に迷うこともないだろう。目の下は桜並木である。西日が強いが、眺望は悪くない。筆山と鏡川、そして堀川がよく見える。場所柄津波が心配だが、二階ならなんとかなるだろう。建物は免震構造だというので少し気が楽だ。

ということ、当分はここに住もうと決心して入居契約をすませ、昨年の二月にまず一カ月ほど「試住」(こんな日本語あるのかな)した後、今年の二月から、

今回は四々五カ月の滞在を目標にやってきた。といつてもまだ完全に引退したわけではないので、時々は東京に戻らなくてはならず、旅費の工面に頭が痛い、それはやむをえないコストだと割り切ることにする。

三つの実験

高知の生活では、三つの実験を試みている。車はもたず、固定電話なし、有線インターネットなしである。さらに、最初の一カ月は、冷蔵庫も洗濯機もない暮らしになった。三世代同居することになって自宅のリフォームをしている妹が、余分になる冷蔵庫と洗濯機を三月後半になったら廻してくれるというので、それまでは毎日水を買ひ、三日おきにコインランドリーまででかけることでした。というわけ。ところが、リフォームの進行が遅れて、さらにもう一カ月待つてくれといわれて、さすがに妻が悲鳴をあげ、冷蔵庫だけでも当面小さなのをレンタルすることにした。

二月九日の到着早々、二人とも大風邪を引いて寝込んでしまったが、十日ほどでなんとかなんとか元気を回復。外出できるようになったところで、田所の久ちやんの勧めで、肺炎球菌の予防接種をする気になり、土佐山田町の田所医院まで

でかける。往復は高知駅からの気動車。六十五年前の汽車通の時代を懐かしく回想。当時は蒸気機関車に連結された客車で、片道30分かかった。その間に、友達に借りた雑誌や本を読むのが楽しみだった。30分以内に読み切らなくてはならないので、速読のいい練習になったものだった。

土佐山田駅に降り立つ。ホームから階段を上って下りて改札口に向うところまでは、昔のままのように見えた。駅前の様子が少し変わっている。東側に大きな駐車スペースができていた。駅から田所医院までは5分もかからないはずだが、たちまち迷ってしまった。通りすがりの若者に場所を尋ねてみたが首を傾げている。そんな医院は聞いたこともないという。諦めていったん駅にもどろうと右折したところで、先に左折して進んでいた若者が、大きな声で「ありましたっ」と叫ぶ。道路脇の別の医院の大きな看板の下に、「田所内科」と書いた看板が小さくかかっていたのを見つけてくれたのだ。

田所医院は、大通りを外れた町中にひっそりたっていた。入り口にも何の表示もない。なんでなのと尋ねてみたら、先代の父君が「医者は宣伝などするものではない」という信念の持ち主で、いまでもその伝統を頑固に守っているそうだ。

清々しい。

久ちゃんがいうには、このあたりはいまこそ家が立ち並んでいるが、後十年もすれば、ほとんど全部なくなってしまうそうだ。跡継ぎがないまま、極端な高齢化が進んでいるためだという。このあたりは津波の心配もない高台で、交通の便もそんなに悪くないのに残念なことだ。三キロほど先には高知工科大学もある。高知市内の生活を堪能した後は、やっぱりこちらに移ってきてもいいかなとふと思った。実は、最初この町でも物件を探してもらったのだが、なかなかこれはないものがあったのだ。

それはともかく、このところ毎日、買い物かたがた徒歩で市内を探検している。万歩計をみると、一日8000歩から10000歩歩いている。今では歩くのがすっかり苦にならなくなった。

もつとも、徒歩生活にすぐ慣れたわけではない。十一月にまずきたときには、二度激しく転んで手をすりむいたり膝を痛めたりした。最初は、数百メートル離れたコンビニでビールなどを買って帰るときだった。堀川沿いの桜並木の下を歩いていたら、古くなった石畳の石がもりあがっていたのに気がつかず——視力が弱い上に、バリラックスの遠近両用レンズだと、足元がひどく見えにくい——たち

まち躓いてしたたか転んでしまった。ビールの缶も破裂まではしなかったが、かなり派手にへこんでしまった。(余談だが、その後この石畳道では修復工事が行なわれていて、道が封鎖されている。花見時期に間に合わせるつもりだなと感心して、工事の人夫さんにいつごろ完了の予定ですかと尋ねると「さあ、僕にはわかりません」とそっけない返事。だが、道の終りのところまでいくと三月二十五日完了予定という立て札がたっていた。桜の開花予定日がこのあたりでは十六日前後だそうなので、これでは花見には間に合わない。なんたる役所仕事かとあきれ返った。)

二度目は、夜暗くなってから茶園場商店街を抜けて京橋商店街に出ようとしていた時。途中にかかっていた橋の歩道を歩いていたのだが、街灯がなかったせいもあり、歩道から足を踏み外してしまった。歩道との段差が大きかったために、下ろした足が空を切り、そのままうつ伏せに倒れ込んだのである。咄嗟になんとか手をつけて顔を強打するのはまぬがれたけれど、またまた手のひらを擦りむいて血だらけになり、そのまま引返す羽目にあいなった。さすがにそれからは注意深く歩くようになり、今回は転ぶこともなしにすんでいる。

農人町の自宅から、はりまや橋商店街、京橋商店街を抜けて帯屋町の入り口までは1300歩ほどである。そこから大橋通りのひろめ市場あたりまで、ほとんど毎日「帯ぶら」をしている。帯屋町のアーケードでは、中の橋通りから大橋通りにかけての北側のほとんどを「ダイエー」が占めていたのが、今は撤退したために板囲いだけが残っているのがなんとも痛々しい。しかしそれを別にすれば、帯屋町は「シャッター通り」化はしていない。人通りもけっこう多い。「ちんちん電車」と「アーケード商店街」が健在なのは、高知市の特筆すべきセリングポイントだと思う。ただし、一つ情けないのは、このアーケードの中を自転車ですぐすいと走り抜けていく連中、とりわけ中高生が多いことだ。自転車走行は禁止されていないという表示がでているのに、平気で無視している。まあ人通りが多くない時間帯だと、それほどの実害はないので、あまり目くじらはたてないことにするか。

今のところ、われわれ夫婦の最大のテーマは、高知の市めぐりである。追手筋の日曜市が最大だが、火曜日には上町で、木曜日には県庁前で、金曜日にははりまや橋商店街で、それぞれ市がたつ。(以前は棧橋通りに水曜市もあったそうだが、訪ねてみるといまはなくなっていた。)冷蔵庫がないので一度に大量買いはできない

いが、逆にその分毎日の買い物を楽しめる。とりわけ嬉しなのが、新鮮な野菜が安く買えること。金曜市にでていた、一抱えもある白菜には200円の値札がついていた。「あれでたった200」しかし、他にもいろいろと買い物をした後だったので、さすがに持って帰れそうもなく諦めたが、その雄姿は、いまでも目に焼きついている。

市で見つけて妻がとりわけ重宝しているのが古い鰹節を砕いて粉末にした「枯木節」である。うま味の凝縮だ。同じようなものを大橋通りの魚屋で買ったらまるで味がしなかったそうさ。

昔ながらの硬めの豆腐もいい。噛んで食べると、滋味が口中に広がる。しかし一番感嘆したのは一昨日の夕餉に妻がだしてきたおひたしだった。実に柔らかくジューシーで、優雅な味がする。しかし何なのかわからない。妻に尋ねたらほうれんそうだという。しかし、まったくそんな感じがしない。味はイクストラバージンのオリーブ油で整えたそうだが、それも効果的だったのだろう。

東北生まれの妻は、漬け物なしには生きて行けない。外食の時でも、お新香の山盛りを注文してぺろりと平らげる。そんな妻にとっては、土佐の食文化には漬

け物が抜けているようにみえるらしい。確かに、漬け物が単品でメニューに載っている店は少ないようだ。市には各種の漬け物が並んでいるが、いろいろ試してみてもなかなかこれというものに行き当たらない。とりわけ物足りないのが——これは私もまったく同感なのだが——白菜で、あの適度に発酵した独特の味わいがいい。要するに「スカ」なのである。まあ、良く探せば期待通りのものが見つかるかもしれないが、平均的には落第といわざるを得ない。

逆に嬉しい期待外れが馬刺しだった。最初、はりまや橋の馬肉店で春野産の冷凍ものの馬刺しを見つけ、試しに買って帰ったのだが、これがなかなかの上物で、私がこれまで知っている松本や熊本馬刺しに負けるとも劣らぬというか、それ以上だった。

だが、料理店でできた生の馬刺しは、さらにそれ以上だった。われわれがちよくちよくでかける居酒屋に、昔の新宿西口ガード下の飲み屋を思い出させる「こみちゃん」という店があるが、そこで毎木曜日だけに供される馬刺しは凄い。さらに凄いのが、馬の「生レバ」である。

牛や豚の生レバが容易には食べられなくなった現在、「生レバ」はそれだけで稀少価値があるが、この馬レバは生臭みがまったくなく、プルプルコリコリし

ていて食感もすこぶるいい。などと感心していたら、数日前に堀詰めの「御畳瀬」という居酒屋で、たこれらも春野産の馬刺しは、さらにそれ以上だった。

ちなみに、この店で鯖の刺身を注文したところ、なんと付け合わせに鯖の白子がでてきた（写真右下）。これがまた、ふぐやたららの白子とはまるで違って、プルプルコリコリした絶妙の味だった。

三月上旬は、「高知のおきやく」の時期でもあり、三翠園でのよさこい鳴子踊り、中央公園での県内各地のうまいもの競べや、フレンチ／イタリ안의店のシエフによるアペリティフ競べなど、いろいろ催し物が楽しめた。なかでもすばらしかったのが、「司」本店が企画した「おきやく」。メーンは土佐の食材を使った懐石料理で、酒は飲み放題。この懐石料理で妻は土佐料理のレベルを見直したそうだが、なんといっても当夜の圧巻は、アトラクションとしてわざわざ徳島から招聘してきた阿波踊りチームの演技だった。

出演者はわずか四人だったが、リーダーの福島俊治氏は、阿波踊りの指導者と



して有名な人物だそうで、その三味線はまさに神技。「渦の会」の踊り子さんの踊りも、軽やかさと優雅さに息を吞むばかり。伝統芸術の重さと深さをしみじみと感じさせてもらい、「踊る阿呆に見る阿呆」と思い込んでいた阿波踊りへの認識が一変した。

市内観光だけでもつまらないだろうといって、弟夫婦が、いまがちょうど見頃だという須崎の桑田山（そうだやま）の雪割桜見物に連れていってくれた。この桜は、梅とほぼ同じころにピンク色の濃い花を咲かせる。ちよūd、菜の花も満開で、ピンクと黄色の対照がすばらしかった。（写真左下）

そこから久礼まで足をのぼし、地元でとれた魚を中心に販売している「大正町市場」と、久礼湾を一望に収める「黒潮市場」を見物して帰って来た。

大正町市場は、大正年間に火災で消失したものを大正天皇の御下賜金350円をもとにして再建し、地名も「大正町」とあらためて今日にいたっているそうだ。



久礼といえば、私が子供のころは土讃線は久礼が終点だった。国民学校二年生の時に、中村に長期出張していた父に呼ばれて中村まででかけたことがある。朝五時に中島町の家をでて、汽車で久礼まで行き、後はバスでくねくねした山道を上ったり下ったりして、バス酔いに苦しみながらやっと終点にたどりついたときにはもう日がとっぷり暮れていたことを思い出す。いまなら高知から中村までは車で二時間と少しで行ってしまうのだが。

須崎へのドライブに刺激されたのか、今度は妻が自分も運転してみたいと言い出した。わが家では、私が緑内障で視野が狭くなってからは、もっぱら妻がショーファー役をしてきた。そもそもドライブが大好きな性格なのである。妻は、家の近くに時間貸しの安いレンタカーの店を見つけてきて、一度どこかに行ってみようという。それならということで、十二時間のレンタカーをして、土佐山嫁石の森梅園まで梅見にでかけることにした。

カーナビにはiPhoneのGoogle Mapsが十分役にたってくれた。もともとiPhoneは、GPSを使うとみるみる電池がなくなるのが難なのだが、この弱点は、ライター口に差し込めるUSB充電装置とケーブルをつけることで解消し、とても快適にカーナビが使えた。しかし、しばらく走ると、道路がひどく狭くなり、すれ違い

もできなくなっていささか肝を冷やしたが、それでも一時間ほどでなんとか無事に梅園の入り口に到着した。

駐車場は、そこからさらに、なんとも狭い坂道を下った先にあった。誘導係の指図でどうにかそこに車を入れて降り立ち、山腹を登っていったところ、眼前に満開の梅が姿を現した。全部で千二百本がぎっしりと植わっている梅林のなかに足を踏み入れると、梅のかぐわしい香りがあたりに立ち込め、うっとりさせられた。

（この日の経験に味をしめた妻は、軽でもいいからやっぱり一台ほしいわねと言いはじめている。車なしの暮らしはどうやら長続きしないかもしれない。）

固定電話は、なくてもさほど問題はない。冷蔵庫のレンタルの注文にFAXを送る必要が生じたが、これはネットからダウンロードした注文紙をプリンアウトして記入したものを、帯屋町のコンビニからFAXすることで対応した。

問題は電話自体で、私の場合iPhoneをすくどこかに置き忘れる。おまけに耳が遠いので、ポケットに入れていても着信音に気づかないことが間々ある。ケータイと共に生活する習慣が身についていないのである。わが家ではいま、DVDで韓流時代劇を見るのは卒業して、アップル・テレビとhulu（月額980円でたくさん

の番組が見放題のアプリ)で米国のテレビ番組を楽しんでいる。Heroesのシリーズは見終わって、Fringeにかかったところだが、登場人物たちが実に自然にとうか当然のことにようにケータイを使いこなしているのに驚かされる。Fringeの主人公の捜査官たちは、被疑者の家に突入したり、逮捕した被疑者を尋問したりしている最中でも、かかってきた電話には必ず出るのである。ケータイが生活に融け込んでいる程度は、米国の方が日本よりも高いのか。それとも私が時代後れなのだろうかと首を傾げてしまう。

ややこしいのはモバイル・インターネットだ。高知市でもWIMAXが使えることがわかったので、私と妻のノートPCは、WIMAX内蔵のものにした。それ以外に、WIMAXルーターのSSIOも購入した。デスクトップPCと、iPad、NEXUSTV、アップル・テレビなどは、これを使ってインターネットに接続している(SSIOの場合は、同時に十台まで接続可能なのである)。メールや検索にはそれでとくに支障はないが、ブロードバンドとなると通信速度の遅さがこたえる。ストーリームで番組をみていると、バッファリングのための中断がしょっちゅう起る。Evernoteその他のアプリで、クラウドとの間にデータのやりとりが頻繁に必要とされるものは、これまたしょっちゅう「応答なし」状態になって待たされる。

そこで通信速度を測定してみたら、なんと下りで1.3-1.4Mbps、上りにいたっては200kpbsしかでていない。(朝のうちだとその三倍くらいはでるのだが。)これではブロードバンドとはとうてい言えない。このままでは、一時しのぎにはなっても、本格的に仕事をしようとするとな能率のあがらないことおびたしい。まあそこまであくせくしなくても、どうせ余生を送るだけだからいいではないかとも思ってみるが、残り少ない人生の時間だからこそ、ネットもさくさくと使いたいではないかと思いなおしたり、悩ましいところだ。昨夜などとくにひどく、Homeはほとんどつながらなかった。そこにタイミングよく、光インターネットの導入は完了していますよというちらしが入ってきた。無理な実験はやめた方がいいのかもしれない。

六十年ぶりのふるさと

高知で暮すのは、高校を卒業して東京にでて以来だから、ちょうど60年ぶりになる。しかし、町の基本的なたたずまいはそれほど変わっていない。ちんちん電車も昔のようにのんびりと走っている。茶園場からだいたいのところは容易に歩いて行ける。むしろ驚いたのは、これまでもっていた高知のイメージが、現実とはかなりかけはなれているのに気づいたときだった。たとえば私のイメージ

のなかでは、高知市は東西南北それぞれ一直線に伸びている土電の路線を中心軸としている。市内だけでなく東西の後免―伊野間もほぼ直線である。

ところが今度歩いてみて気がついたのは、それがおよそ間違ったイメージだったということだ。

そもそも茶園場から電車で二駅分のはりまや橋にかけてでさえ、道路はかなり東に曲がっているではないか。もっと驚いたのは、母校を訪ねるべく九反田橋を渡って南下したら、ほどなく栈橋通りに突き当たりそうになったことだった。そのさらに東の土佐道路(昔はなかつた)を南に行くと、これまた栈橋通りと交差してしまう。並行に走っているはずの道路がどうして交差するのか。答えは簡単で、高知駅から南にまっすぐ行くとはりまや橋だが、そこからさらに南に進んで潮江橋を渡るあたりから、栈橋通りは³⁰。近く東に斜行しているのだ。

中学一年生のころ、汽車通だった私は毎日高知駅と潮江を往復していた。そして潮江橋を渡った後は、左に逸れる栈橋通りを離れて直進していたはずだ。

それなのにどうして栈橋通りをまっすぐな道だと思いついてしまったのか。いまあらためて思うと不思議でならない。きっと、私の記憶がものごとをより単純

化する方向に書き換えられてしまったのだろう。

高知には、ホテルやマンションを除けば、高層ビルはいまだにほとんどない。自動車道路も、だいぶ整備されてきてはいるものの、他県——たとえば私がよく通っていた山形県の鶴岡市に比べるとまったく貧弱である。まあ、だからその分「郊外化」の被害に逢うことも少なくてすんでいる。少子化・高齢化と人口減少が一貫して進んでいる高知で、鶴岡市のようにいたるところに大型の郊外ショッピングセンターを作ろうものなら、悲惨な未来が待っていることは疑いない。(鶴岡でも、すでにその傾向は見え始めている。)

もつともそれと同時に、くるま社会化に対応して、くるままでのアクセスを前提した「産直」店がいたるところにできていく。無料で配布されている産直マップをみると、県内に1000数百店がひしめいている。こういう店をうまく利用しようと思えば、やっぱりくるまなしというわけにはいかないのかもしれない。

といった具合で、実験の方は、固定電話以外はほとんど失敗に終わったようだが、それはそれとして高知の暮らしにはけっこう満足している。後は、年金生活を補完するための収入の途を少しでもみつけることくらいか。

傘寿を前に繰り言

後期高齢者になったら内科医と

整形外科医をホームドクターに

荻谷 泰弘

☆無知と頑固は命取り

二〇十二年十月末のテニスの試合中に転倒して受けた膝と腰・肩の痛みが年を越しても治らず、よりひどくなって少しの時間ワープロに向かうこともできなくなった。右足の膝や大腿部の筋肉痛も激しくなり我慢の限界を越したので、かかりつけの医院へ血圧の薬を貰うついでに膝と腰の痛みの相談をした。

医師いわく、『痛み止めに効く湿布をこれまでにならぬ程度も出しているのに、原因究明の診断を受けて来なかったからこの様なことになったんですヨ！、整形外科を紹介しますからチャンとした診断を受けてください！』と半ば呆れ顔で真顔で言われた。私には古くから脊椎滑り症があるので、整形外科へ行くとやれ手術だと

か入院治療などと言われるのが厭で今まで行かずじまいだったので、今回も同じ様に断ろうとしたが、先生は『その痛みの原因が単に打撲であればよいのですが、ほかに原因があるとも考えられますので、思い切つて一度専門医の診察を受けて来て下さい』と諭された。四月に入つて湿布薬を貰いに行くと、家から歩いて三分の距離の日赤福井病院への紹介状を渡されて受診することになった。

紹介状を持って予約日の五月二十八日十時二十分に日赤の整形外科外来の受付に行き、手続きをしてベンチで待つこと三時間三十分。診察室前への案内番号が出て移動。五分程で診察室へ呼ばれて、初めて医師と対面して問診を受ける。五分程で足・腰・背骨のレントゲン写真を撮つてきて下さいと指示されてX―線科へ。撮影は四〜五分で終わり、再び整形外科の受付に終わった旨報告して待つ。十五時三十分診察室へ呼ばれて、写真を見ながらの説明を受ける。

『見事なものですなえ！膝から下の骨は湾曲していますネ。これは膝のお皿の軟骨が擦り減っているのに無理してそのまま使ってきた証拠です。もう限界にきていることを示しています。これだったら痛みも出て来るのが当たり前。ここは人工関節にした方が良いでしょうネ。どうします？手術は簡単ですよ！』と、いつも簡単。『手術は厭です、止めておきます』と断ると、医師は『じゃあヒアルロン

酸でも入れますか？ 気休めみたいなものですが……』と。『それから背骨ですが、お年寄りの特徴で曲がっていて、腰椎には滑りがあり椎間板も擦り減っています。この間隔が狭くなっています。骨にはこのように棘が出ている、これが年寄りの特徴です』と、映像を指しながら飾り気なく言う。『この所の隙間が狭くなっているから椎間狭窄症なのです。腰の痛みや足の痛みが出ているでしょう。この痛みはブロック注射で和らげることは出来ずから、今すぐにもみましょうか？』と。恐れていた神経ブロック注射が出て来た。

これは近所のゴルフ仲間が、一昨年夏に市内の整形外科病院に二ヶ月入院してこの治療を受けたのを見舞っていたので、即座に『イヤ結構です』と断った。医師は怪訝そうに『そうですか』と言って強要することはなかった。

何故断ったかと言うと、今の私は独り身で生活していて、畑の世話や庭木の枝切り、庭の雑草引き、仏壇の世話など多くの仕事があるので、注射の為に入院して家を空けることは出来ないと判断して即座に断ったのだった。

『じゃあ二週間後の火曜日の十三時三十分までに受付に来て、MRIの撮影をして来て下さい。詳しい処置や相談はそれからしましょう』で医師の診断は終わった。次の予約表を受け取って十六時二十分に会計を済ませて帰宅。

トイレに行かず食事もせずの一日は終わった。ただただ『忍』の一字。収穫は整形外科の患者の多さを知った事。自分を含めて老人の多さ、歩行困難の人、介助を必要とする人の多さに驚いた。

四日後に紹介してくれた医師に受診の報告に行つて目を覚まされた。

すでに日赤の担当医から報告が来ていて、総て了解済み。『紹介してあげた先生は、日赤でも評判の高い最も忙しい先生です。その先生がすぐに注射をしてあげると言っているのにそれを断つて帰るとは何事ですか?』と。小生は『私はその神経ブロック注射は入院して受けるものと合点していましたが、家のこともあるしすぐには入院出来ないと咄嗟に判断して断つたのです』と弁解した。落ち着いて考えれば分かることだが、馴れないこと故、慌てて混乱して正しい判断が出来なかつた。

二週間後、MRIの撮影を済ませて三十分程受付で待ち、診察室に呼ばれた。医師に先日の注射拒絶の非礼を詫びた後、ヒアルロン酸と神経ブロックの注射を改めてお願いした。MRIのキレイな画像を見ながら医師は『もはやこの状態では元の様には治りませんが、少しでも痛みを和らげて楽に動ける様にはなるでし

よう』と言ひ、『じゃあ隣の部屋で注射をしましょう』と言つて処置室への移動を促した。開業医では入院して注射をするのに日赤ではすぐに帰宅させるのかと少々不安があつた。処置室で看護師に言われるままに注射の準備をして待った。注射は医師が膝にヒアルロン酸をして次に俯きにされてお尻にブロック注射をした。恐れていた神経ブロックの注射は薬剤が入るや下腹部が熱くなる感じがして思わず『ウツ！』と唸つた。看護師がそのまま二十〜三十分安静にしてい下さい、とタイマーを仕掛けて出て行つた。タイマーが鳴つて、『もう良いですよ！』と看護師に起こされて身支度をする時には、体にフラツキを感じたが、病院からは自転車に乗つて帰宅することが出来た。当日の入浴はだめ。翌朝、不思議なほどに腰痛がなく、膝の具合も良いように感じた。

その翌日にはテニス仲間が来て一試合に付き合ひ、その翌日には近所の仲間とゴルフに行けた。しかし、さすがに歩き疲れてハーフで打ち切つた。

二週間後、二度目の注射を受けに行き、医師に注射の効き目を報告した所、ステロイドだから続けては使えないのですと言つて、注射の準備を看護師に指示した。薬の正体を聞かされて驚いたが、副作用が出なければ幸いと思ひ二度目の注射を受けた。続いて二週間後の三度目の注射は、医師が状態を聴いた後、今日は

ブロック注射は休んでヒアルロン酸の注射のみとなった。過剰な薬剤を使用しなくなった医療を見た感じで、安心した。

後日、掛かり付けの先生は、『荊谷さんの様に少々の痛みや辛さを我慢して医者や薬を嫌うのを痩せ我慢と言いませんか？ 痩せ我慢はやめて、お年なんだから素直に人の言うことを聞いて指示に従って下さい』。『後期高齢者になったら、内科医と整形外科医をホームドクターに』と、やんわりとたしなめられた。反省！

☆☆悔悟と人生再出発：脚下照顧：

足下を照らすと自分が見えるというか、自分の歩む道がはっきりと分かると言われる。足下さえ明るければ、闇夜でも転がることはない。人生で脚下を照らし、己を顧みることが出来れば、素晴らしい人間になれるだろう。だが、それが出来る人は少ない様である。懺悔と反省を繰り返しながら自分の進む道の方向性は正しく維持出来るだろう。前者は悔い改める、反省は顧みる・振り返るで、前者よりも少しは軽い感じはするが、ともに自分を糺そうとする気持ち（意志）の表れているものと思う。

停年を迎えた翌年の三月、自分の足跡（行い）の掃除を兼ねて、四国八十八ヶ

所と高野山の巡礼に出た。心底には信心の観念も多少あったと思う。

JR四国のジパングクラブの企画で、ジャンボタクシーで巡る十一泊十二日のコースを選んで参加した。高松のホテルに集合して、予定人員八人のところに女性二人、男性五人の七人で出発。二日目朝、高松のホテルを出発して鳴門の一番札所、靈山寺まで直行。車中で一通りの作法の説明をドライバーから受け、車中のビデオを見ながら予習をしたが、観光気分の男二人は馬の耳に念仏よろしく聞き流し、一人は俳句の旅を吹聴する新潟出身の元小学校校長、句作を自慢。

最近TV放送されている徳光和夫アナの遍路旅と重複する姿。女性二人は装束もキチンとしたお遍路さん。残る二人の男、私と福岡出身者は共に親を亡くした者同士で供養を兼ねたものだから一応身なりも装束を整えていて、都合四人は遍路の姿。俳人と観光客は普通人のいでたち。とにかくおかしな巡礼であった。

装束とは、言わばユニホーム。一応正式の衣服だから参拝には理に適っていて不都合な点はない。だがそれ以外の服装では許せない行為があれば必ず叱責を受ける。菅笠は合格だが帽子ではダメ。山門をくぐる時は菅笠は取らずに入れるが、帽子は脱ぐ。金剛杖はステッキではないので、ステッキはどこでついても宜しいが、金剛杖は橋の上では駄目。等々、色々な決まりがある。

幸い相棒となった福岡からの方と自分はお経を暗唱できたし、参拝の作法も一応知っていたので最初の寺から先達役の運転手に手間をかけずにスムーズに巡拝ができる様にと一行の歩を進められた。

手洗い、口濯ぎ、打鐘と参拝の基本は適宜説明し、線香・蠟燭の備え方、基本動作をその都度注意しつつ、他の巡礼者に恥じないように、迷惑にならない様に巡拝を進めた。

納経所での押印はドライバーが一手に引き受けて、我々のお参り（読経）中に済ませてくれたので、他の大勢のお遍路さんを避けて手際よくお参り出来た。

二日目の予定を終えて宿泊所へ入り、相棒と初めて同室の夜となった。気疲れでグッスリ眠って翌朝からは読経のマラソンであった。お経をスムーズに読めるために車中での雑談を止めてお経を声を出して練習したが、観光客と校長は無視したので、なかなか唱和できなかった。

ドライバーは観光にも気を配り、名所の説明にはぬかりなかった。

三日目の晩は室戸岬の手前の二十三番薬王寺近くのホテル。歩いた距離は少なくとも、曲がりくねった山道のドライブでは体が異常に着かれる強行軍であり、夜はグッスリ休んだ。

四日目朝、阿波最後の薬王寺を済ませて室戸岬の山上に建つ最御崎寺からは土佐の札所。景色もガラリと変わり、私にとっては懐かしい故郷、南国土佐の風を胸一杯吸い込んでお参りを始めた。お寺を降りて室戸岬の近くの食堂で潮風に吹かれながら昼食を済ませて、安田、手結、野市、佐古を経て大津の国分寺まで来た時にはもう午後三時を過ぎていた。

少しの休憩を取って一宮の善楽寺のお参りを済ませたのが四時半過ぎ。南に五台山を見ながらお城近くの電車通りのホテルに入る。早い夕食を済ませて観光客の為に攻城を案内。たまたま花見の真っ最中、桜の下での宴会を見せてやった。女性グループの箸拳の賑やかさには驚いていた。

五日目は竹林寺から足摺岬までの最長区間。この日ぐらいいから四人（女性二人と私と相棒）のお経は上手く合う様になって来た。足摺岬の金剛福寺の納経を済ませて、暮れかかりの岬見物、椿の林を見て民宿へ。民宿の夕食は超豪華。何にも文句の出ようがなかった。

六日目、岬を発って土佐清水港から弘法大師の見残したと言われる龍串・見残しを観光して土佐路最後の延光寺を済ませて伊予路へ入り、宇和島から松山までの長距離に挑む。途中で大豪族の衛門三郎と弘法大師との四国遍路の始まりの因

縁話や、西林寺の近くの杖ヶ淵公園では、大師の起こした奇跡の清水を湧き出させた浄水公園などを見ながら北上して、夕日の傾く道後温泉街の旅館・椿館別館にたどり着いた。遍路が橋の上で杖をついてはいけない理由となった“十夜ヶ橋の言われ”も見たので、後日の為にはなった。

道後温泉の内湯には入らず、坊ちゃんでおなじみの道後温泉そのものに入りに行くこともできた。巡礼の後半、明日からは心新たに巡る事になるので、伊予の食材に皆、舌鼓を打っておとなしく就寝。

七日目、松山市内の石手寺から北東へと歩を進めて今治市内近郊のお寺に参拝して、しまなみ海道の吊り橋をみて今日の宿、湯の浦温泉郷に入る。宿の温泉風呂で汗を流す。

八日目、四国の霊峰石鎚山に近い横峰寺から伊予西条・新居浜と距離はあるが、お参りするお寺の数は少なかった。車の移動時間が多くなり、車中での居眠りの頻度も増えてきた。新居浜のリーガロイヤルホテルに宿泊。近くのコンビニで飴玉と少々アルコールを購入補充して翌日に備える。

九日目はいよいよ伊予の国を離れて讃岐路に入る。この巡礼で使う三ヶ所の口

トプウエイの二番目を使って、阿波・讃岐・伊予の三ヶ国にまたがる最高所の雲辺寺に参拝。ロープウェイの駅周辺の風は下界よりもかなり涼しい。

観音寺の砂の一文銭をみて最後の難所と言われる弘法大師が幼少時に学んだ弥谷寺から出釈迦寺を経て大師生誕の地善通寺で一日を終え、宿泊は琴平温泉。

十日目は早起きして琴比羅神社を参拝。高い石段を上り、讃岐平野を眺めてから下山。旅館での早めの朝食を済ませて四国最後の巡拝に入った。今日の最初は七十六番金倉寺で、日露戦争で名の知れた乃木大將が善通寺師団長時代に下宿していた所だ。そこをスタートしてこの巡礼の最終過程、源平の合戦の古戦場屋島へ車を進める。天皇寺の悲恋物語や根香寺の怪獣退治、また大師が中国へ渡る際に土地の人に八個の栗を渡して飢饉に備えるべく栽培せよと渡した八栗寺の逸話などを聞く。

本日最後のお参りは、土用鰻の逸話で有名な平賀源内の生家近くの志度寺。明日に二ヶ寺を残して四国最後の泊り宿”喜代美山荘 花樹海”へと西日に向かって車を走らせた。高松市内はかなりの混雑で、予定を過ぎて宿に到着。宿は思い切りデラックス（外見）。テレビドラマのロケによく使われている垢抜けしたホテル並みの旅館である。館内には若き日の弘法大師像が祭られている。山腹に建って

いてフロントは確か六階。我々遍路の部屋は最下層の一階。北に向かった部屋で瀬戸大橋が見える景観である。風呂は最上の九階。その朝風呂の景観は天気さえ良ければ屋島の先端から昇る朝日が壮観。

いよいよ明日は高野山参りで全行程を終えるので、全員ホテルの売店で銘々土産の購入・発送と慌ただしかった。

朝食を済ませて十一日目朝はいつもより早い七時半に出発。市内の八十七番長尾寺を終えて徳島県境の最終八十八番大窪寺へ急ぐ。大窪寺で八十八ヶ所巡礼の修了証書？を購入して、高野山を目指した。

鳴門大橋は渦潮の上を通り、淡路島有料道路を経て、明石海峡大橋を前にして昼食。海峡を渡れば混雑する都会の高速道路。神戸・大阪・堺と沿岸の道路を突っ走って関西空港道から別れて東南方向を目指し紀ノ川を渡り葛城の山間部へ曲がり曲がりの山道を約二時間走って、陽の沈む前に大門前にたどり着いた。

お経に無関心だった二人、俳句作りを自慢して肩肘張っていた元校長も少しは何かを感じ取ったものと見えて、口数は少なく（疲れたせいかな）なった。他の四人は満ち足りた顔であった。

大門前で一旦下車して一礼して山内に入った。山全体がお寺である。慣れた下

ライバーが最後の宿泊所、持明院の宿坊に車を付けてくれた。宿坊には多くの部屋があり門の正面が本堂で、宿坊とは渡り廊下で隔てられている。当番のお坊さんに部屋に案内されて、入浴・夕食・それぞれの供養の有無を聞かれ、明朝のお勤めについてなどの説明を受けて旅装を解いた。

アゝシンド！ が本音ではあつたが、全身から疲れも何もすつ飛んだ気分。夕食は言うまでもなく精進料理。お坊さんがビールですかお酒ですかと聞いてくれた。銘々酒とビールを頼み精進料理で精進落としをした。緊張しながらもゆったりした気持ちで食事を終えて就寝。辺りは静か。都会の喧騒はなく、超静かな山寺の夜の別世界を満喫した。

朝の勤行は六時からで、四十分程で終わった。正座の出来ない人用に椅子も用意されていて楽にお勤めが終えられた。食事を終えて宿坊を出て、金剛峰寺から奥の院までのお参り。参道脇の杉の大木。全国の諸大名の墓所等々を巡って奥の院の弘法大師のお墓を参拝してこの旅は終わった。信仰心がなければ、この旅は出来なからう。素直にお大師様に感謝。午前十時過ぎには山内での買い物済ませて大門で一旦下車して深々とお別れの一礼をして一路新大阪を目指した。

高松を出発して始まった巡礼の間、毎日の昼食は、阿波・伊予・讃岐では皆がウドン。手早く食べ終えてすぐに発てるし、しかも安い。土佐ではウドンを避けて、室戸では刺身定食、須崎ではタタキ定食を薦めた。何故なら土佐にはウドンの習慣がないからである。

初日（実質）は二日目の阿波路では巡礼の仕草も品位もなかった様に見えたが、土佐路に入ると慣れて落ち着き、伊予路ではかなりお遍路さんらしくなって良い雰囲気になった。讃岐ではもう一人前のお遍路さんになった様だった。

毎日長時間緊張しっぱなしのドライバーの安全運転で、十日間病人も出ず、事故にも遭わず巡礼できたことにお大師さんとドライバーに感謝して新大阪駅で解散した。

新大阪から二時間と少しで家に帰り着き、荷物を置き傘をとり、お大師さんの身代わりの金剛杖を洗い清めた後に家に上がった。金剛杖を床の間にたてて家内に十一日の経過を簡単に話した。

前後するが、玄関を入った時にはもう再度の巡礼に出たくなっていたので、その旨を家内に話すと、『行けば良いではないですか』との返事。これが、かねがね聞いている“四国病”だなと思った。一度巡るとすぐにまた四国巡りをしたくな

るとのことである。初日からの観光気分の人組と俳句の先生には不愉快な思いをしていて、いつ爆発するかと内心不安であったが、爆発せずに良かったと思う。別に無理して我慢した訳ではないが、多少辛抱、我慢と仏様に言い聞かされていたのかも知れない。無意識の修行だったのかも……。

☆☆☆四国病の発病

二度目の四国遍路 最初の遍路から帰って、その年の十月下旬に二度目の巡礼に出た。最初の遍路から帰ってすぐに巡礼に出たくなり、何だか落ち着かず思い切って出発した。夏の名残の暑さの残る時期であり、日中は暑く感じられたが、昼間の時間が大分短くなって、朝の風は涼しくて快適。

前回の旅から六ヶ月、歩く道路の感触が微妙に違って新鮮な気持ちでスタートした。同行の仲間は五人。栃木県から来た一歳年上の男性、山形県から来た、かなり年長の会社経営者の男性と東京から来た夫婦。山形からの人は巡礼に馴れた人。栃木の人は公務員を定年になった人で初めて。ご夫婦は共に再婚者で、それぞれ親の供養に来た初めての巡礼者。宿は男女別々だから夜は奥さんは個室。男性は『いびき』の都合で毎日交替で相手を変えての相部屋。おもしろい企画で

ある。宿泊所は前回と同じホテルと旅館。私の今回の目的は自分の両親と家内の両親の供養をと目的を決めてのものだ。

秋の遍路路は春とは趣が全く違う。新緑と紅葉とでは陽と陰の違いがあるナと感じながらの旅だ。参加者全員が言わば祈りの旅だから、気楽な気持ちでご本尊に祈り、心の中で身内の仏を拝むので、一行は遠慮気兼ねなく素直な気持ちでお経を唱え一体感のある一蓮托生の言葉通りの旅であった。

車中の席替えは同じ姿勢でいる辛さを解消するために、午前と午後の二回。良い雰囲気十日間の高野山参拝まで無事に終わった。

四国八十八ヶ所の遍路には言い表せない不思議な魅力を感じさせられる。それぞれのお寺の参拝者は時季の良さもあって、境内は朝早くから混雑しているにも拘わらず銘々が唱える読経が互いに邪魔にはならず、むしろ和合して落ち着いた雰囲気醸し、安堵の境地にいる心地であった。これが修行かナ。

この二度目以降、今日までに亡妻の供養も含めてこの巡礼を十四回繰り返したが、その都度新たな気持ちと心の落ち着きを得ている。この四国八十八ヶ所巡礼には「終わり」という言葉はないように思う。

☆☆☆☆悟りを開いた和尚さん

寺参りをして読経をし、写経をすることや黙座を行うこと、滝に打たれたり山野を行脚することなどの行動を修行というようである。

先日何気なく目にしたテレビ番組の古寺「百」景で、京都の臨濟宗妙心寺の偉いお坊さんが、『さとり（悟）とは何か？』と言うと、それは『差をとることである』と説明された。それに続く一連のお話を伺っていて、それが『何から』『何を（どのような差）』を取るのかという説明がないまま、次の話題へと進まれたので何となく釈然としなかった。

この様な話が禅宗の問答かなと思っただけのままにしておこうかなと思ったりもしたが、これで説明出来ているとでも思っているのかナと妙な気持ちになった。続く画面では建仁寺や相国寺、龍安寺など京都の禅寺五山の建物や庭園が次々と紹介されて、問答の答えの糸口になる話は全く出ては来なかった。

そこでこのもやもやした正体不明の『差をとる』と言う言葉に、しつこく迫ってみようと思う様になった。

どこにどのような形で存在する『差』なのか？ また何と何の間にある『差』なのかを、明瞭にしなければ答にはならないと考えを巡らせた。禅僧の話は俗人に

は分かりにくいのが当たり前かなと一時は良い加減に納得しかけたが、それでは濟まんぞ、と開き直って考え始めた。今までの自分なら、禪坊主の間答は分からないものと始めから決め込んで放り投げたところだが、この度だけは何故か放り投げるどころか、何かに吸い寄せられる様にいやにこだわり始めた。

何か事ある毎に説教の一つも言っていて叱ってくれていた親は既に無く、頭に来て暴走し始めた時には心底諫めてくれた妻も亡くなった今、日々の食事を作り仏壇に供え一日を読経で始めて夕方読経で終わる日々を過ごしている現状に馴れて沈滞して生きているだけでは物足りなさを感じて何か生産的なこと、前向きに進んで行く事をしなければと思っていたこの時に、丁度この『悟り』の問題が出て来たので、これを絶好の暇潰しと自己活性化の為にしようと食らいついて深く考える自己『問答』を始めた。

『悟』―『差を取る』の意味を、ただ字面だけで見れば、そこにあると思われる隔たりは、あると思わなければ何もないということである。先ず『差の認識』から始めるべきであろう。較差をなくすると平等（たいら）になる。『差がなくなる、同じになる』という事だし、較差は質・量・数（形）がなければ比較はでき

ない。算数的に考えれば、実態のないものから実態のないものを差し引く事は出来ないから元々ゼロで、何の意味もない。この『差』なるものは算数的なものではないと考えるべきである。

そこで、「A」と「B」の二つの対象物を「仏」と「己」として考えてみた。すると、両者間には非常に大きな『差』があることが分かる。その『差』は較べる尺度のないほどの大きな『差』であることが分かった。この『差』を取ることが出来れば、「自分」は「仏」になることが出来るだろう。だが、いくら修行を積み、徳を積んだとしても「自分」は「仏」になれない。それは不可能な事だ。何故なら修行というものには十分だという限度がなく、満足するに足る限度も示されてはいないからである。

「仏」は総てにおいて完成されたものとして存在するから、永遠の目標とされるものであつて、ある意味では抽象的な存在であるかも知れないが、人間を模した姿形をして具現化されて存在し目視する事も出来るが、その「仏」に「生身の人間」がどのように努力してみても『違い』のないもの『同じもの』になる事は永遠に出来ないという事が分かった。

『差を取り去る』ことが不可能だとしても、限りなくその『差』を縮めて『仏』

に近付くことは、修行に徹することによって近付ける事はあるかも知れないとは考えられる。だが、悲しいかな生きている限り永遠に『悟』の境地には達することとはできっこないだろう。即ち、生きた『仏』になることは出来ないと言うことに気付いた。このように何日間かに亙って同じことを繰り返し考え続けたが、結論は同じだった。

今の今まで真に『悟』を開いた人、『悟』の境地にたどり着けた人は生きてはいないのである。(その人に会った人もいない。)

結論として、人も『悟る』ことは出来るかも知れないが、生きている限り『悟れないのだ』と言うことだ。即ち、『悟り』の域に達した瞬間に『仏』になっているということが現実であるということだ。

出羽三山の一つ、月山の即身成仏が即ち『悟った人』ではないかと思う。十穀を絶ち、木の皮や草の根などを食べて命をつなぎ、努力を重ねて自然(この場合は神仏)との『差』を取る修行をして、総てをなし終えて自然になりきったその瞬間に『悟り』の境地を開くのであろう。そうだとすれば、人間は『生きている限り永遠に悟れない』のであろう。それで良いじゃないのか。つまらんことを長い時間かけて考えたものだ……。俺は余程暇を持て余していたのかなア。

いや余裕ができたのだと思う。自分なりに考える事が出来たと喜ぶべきであろう。無駄な事に時間を費やして考えるということも時には心の栄養素になるのではないかと思う。無駄なことを無駄と思わない様にすることも大事なことだと考える様になった。

私の親しく師匠として十数年付き合ってくれた曹洞宗大本山永平寺の元典座職、『佐藤一彰』和尚は永平寺での六年間の典座職を勤めて後、山形の自坊に帰られて巷の『食』の乱れを糺し、食の持つ正しい教えを活発に広めて来られたが、昨年九月に惜しくも亡くなられたとの知らせを昨年暮れに受けた。その和尚の奥様から先月電話があり、色々と老師の逸話を懐かしんだ後、奥様が、『和尚さんの死に顔を見て、その穏やかさが今まで見たこともない良いものだったことが、私にとつて一番有り難かったです』と言われた。その言葉が印象的である。

和尚は豪快な反面繊細、仕事（修行）上では非常に厳格な人ではあったが、別の一面では常識人でインテリ坊主であった。その『死顔が素晴らしかった』と聞いた瞬間、私は和尚はまさに死の瞬間に『悟られたのだナ！』と感じた。和尚は私に『答』を渡してくれたように思った。

その答は『人間はどこまでも人間、仏ではない』ということで、何の苦勞をし

なくても『死ねば仏になるということだ』とニヤリと笑っている顔を思い出している。和尚は長年修行して、その最後の瞬間に『ようやくその行を終えられたぞ』と思つて旅立つたのだと思う。『悟』を求めて修行し、無心のうちに死ぬことが『真』の修行だと、私には思えるようになった。

妙心寺の放送の一週間後に滋賀県大津市の三井寺の放送があつた。三井寺は

『役の行者』えん ぎやうじやによつて始められた山岳信仰の原典的な修行の形態であることが解説された。いわゆる山伏の行である。山伏は修験者として、柴橙護摩を焚いてその周りを読経しながら歩き無我の境地に到るという。その一連の行動が大峰山や熊野の山々を無心に行動しながら、野や山に在られる神や仏（自然）と一体化しようとする行である。

その極致が『人』と『自然』と『神仏』の間にある『差を取ること』、即ち『一体化すること』、『悟』につながるものだと知つた。人が『神や仏（自然）』と一体となれるにはどうすれば良いか。滝に打たれて山野に伏し、無心に行脚して得られる境地とは一体何だろう……？そこで無心になれて『悟』ることができる。即ち『死』ぬということだ。『仏』になるのではないか。

『悟り』は永遠のものであり、人間には永遠に生きられる力（能力）はないので、『悟』と『死』とは同一線上にあると言える。『悟る』とは『死ぬこと』であると結論する。

◆余談

日本国は永遠に敗戦国なのか

日本国憲法第九条は日本にとっても世界にとっても不幸な代物でしかない。

あつもの

羹なますに懲りて膾なますを吹くのたとえよろしく、大東亜戦争に原子爆弾という国際法上

違法と言われる武器を使われて負けたからと言って、何も自分の国を武力で護る軍隊をもたずに、戦争は一切しませんと戦争の放棄をした我が国は、平和国家なのだろうか？ だからと言って外国から攻めて来られない保証はないし、武力の無い国家が外国から攻められないという保証はない。

原子爆弾を投下したアメリカは日本を占領して裸にして、将来に禍根を残さない様にと平和憲法なるものを押し付けたとしか思えない。

日清・日露・日支事変以降大東亜戦争に至るまでの日本の武力（戦力）・戦闘能

力等々)に恐怖心を持ったから、何としても日本から軍隊を無くさなけりやとでも思ったからであろう。

そのお陰で、民主的で平和国家日本が生まれて、軍備を持たない手軽さのお陰で、驚異的に高度の経済成長をして裕福になった。経済的に発展したお陰で国民は平和ぼけを起こしてきた様である。

支那(中国)や朝鮮(韓国)へ日本の工業資産(織機)を無償で援助したものであるから、日本の繊維産業が傾き斜陽化した自治体(福井県など)も出て来た。

色々な有償・無償の援助をして来たにもかかわらず、最近では歴史問題(植民地政策)や戦時下での行為に言い掛かりを付けては賠償、賠償とお金を無心されるばかりか、領土まで侵犯される様になってきた。

大東亜戦争は日本が仕掛けた悪いものだったというのが奴らの主張の根本であり、戦争と言う言葉を振り回せば日本は何も言えなくなるとでも思っているようである。

恐喝されて奪われた経済援助金のお陰で奴らは経済的に裕福になり、軍事大国にまでなつて来た。

戦後六十八年、そろそろ太平の夢（アメリカにおんぶにだっこ）から覚めても良いころではないか？ イヤ覚めるべきである。

沖繩をいつまでも人質にしておくのか？

本当に本土並みにしようとするならば、アメリカに堂々と対等に話をつけるだけの日本にしなければならんだ。

韓国は何かにかけて日本に言い掛かりを付ける。既に政治的に解決済みの従軍慰安婦問題でもお金をもっと分捕ろうとして裁判を起こしたりしている。振り返ってみれば、朝鮮動乱の直後には、李承晩ラインなる国境線を勝手に日本海に引いて、漁船や漁民を捕えては賠償金を巻き上げる暴挙を繰り返した挙句、島根県の竹島を占拠する暴挙に出た。その後何十年も経った後に、大阪の在日韓国人出身者の大統領まで出現して、島に異常な肝入れをして軍隊までも上陸させて実質占領している現状をどうするのか。

また、支那（中国）が尖閣列島に巡視船を進出させて領海侵犯したり、漁船を唆してまでも不法な漁をさせて横暴な行為を繰り返し、挙句の果てには根拠もない自国の領土だと主張する。国際法も何もあったものではない。理不尽そのもの

だ。軍備をしつかり整えておればこの様にならないのだが……

恐喝。恫喝とも言える現実に対して反論・反撃できないでいるならし無い、根性のない独立国は世界中には我が国以外にはないのだと！と私は言いたい。

自衛隊は軍隊ではない。装備も数も僅かで貧弱。まるでおもちゃの兵隊である。

民主党政府の某閣僚に言わすれば「暴力集団」と表現された事実は嘆かわしい事である。鳩山・管・野田内閣の失政は罪万死に値する。誰がその責任を取ろうというのか。どうするの？ここからが、大事な話なのです。

私の町内に住む八十六歳になる女性。旧制高等女学校卒業のオバアチャン。亡妻が親しくしてもらった方で、世話好きで公共心の強い好人物。この方が、先日次の提言をしてくれた。

町内の公園に遊びに来る子供達や、それに付き添ってくる若いママたちを見てみると、「もう世も末だワ」と思う程情けなくなる。何故なら、ゴミは散らかす、片付けはしない、自転車では町内の道路を道一杯に並んで飛ばす等々……全く躰がなっていない。やりたい放題・言い放し道徳心なしの日本人だワと嘆く。学校教育も悪いが、家庭教育ももつと悪い。特に若いママやパパの家庭教育のなつて

いないことに腹がたつ：と。

日本を良く変えるには憲法から変えなけりゃいけんネエ。憲法を変えて教育内容から変えて、十八歳になったら男女共に三年間は自衛隊勤務を義務付ける。自衛隊がいやなら、耕作放棄の農地耕作事業に三年間従事を義務付ける。そうすれば少しは落ち着いて以後の仕事にじっくりと取り組む様になって、産業の発展につながる様に思うがどうでしょうかねと。

文字に書くと実情は表しにくいが。言葉では心が通じる感じがする。

軍隊がなければ戦争もないだろうか。武力がなければ、いまや立ち所に制服されてしまうだろう。イスラム圏のゲリラの現実を見たらどうか。

『自分の身は自分で守る』これは最低の義務と権利と承知すべきでしょうと、そのオバアちゃんの説に同感。

新聞やテレビの解説者たちの言うことは理想や空想であって、共産党の言うことと同じ。どこの国籍人かと疑いたくなるし、奴らの無責任なご意見に腹を立てたり、血圧を上げたりするのは非常に不健康だワ、と嘆いている昨今である。

この際日本も憲法を改めて軍備を整えるために消費税を大幅に増加させて軍

需産業（兵器産業）を活発化させて、外国に蹂躪されないようにシツカリと両足で立っていないければだめだ。日本の歴史を昔に戻すのではなくて新しい日本歴史を組み立てて、曲げられない歴史教育を立ち上げるのが現代日本ではないだろうか？

落ち着いてゆっくりと古事記や日本書紀を参考に真の日本史を立ち上げる可きである。嘘の歴史観を速く払拭すべきである。

私が昭和三十四年四月に航空自衛隊第二十一期幹部候補生になって入隊二ヶ月後に李承晩ラインを潰せと候補生学校で先輩の任官ホヤホヤの幹部や高卒の曹候補生たちと息巻いていた時に、隊長に「君達は自衛隊を潰す気か」と叱られたが、当時の隊長も本心ではなかったと思うし、後年同期会では笑い話になったことから、あの当時はそうすべきだった（止めるべきだった）かと納得もした。新しい日本の軍隊を作るには昔の帝国軍隊ではない民主国家日本の軍隊を作るのだ。暴力集団ではないものを。腑抜けの日本人にだけはさせたくない。

慰安婦問題

大阪市長の橋下さんが言ったことは正しいことだし恥ずべき問題でもない。戦

時中の軍隊には慰安所・慰安婦は付き物なのだ。連合軍にもチャンとあったのだから。映画”ナバロンの要塞”(英国海軍がドイツ軍の要塞を攻める)くだりの女性パールチザンの一人がスパイ容疑がかけられると慰安所送りになると脅え射殺されたシーンがそれを証明している。何も日本軍だけの悪事ではないし、被害者が韓国女性だけではないと私は言いたい。

日本人よもっと自信を持って！ 世界をリードする力と能力を持つとう！

闘病記

尾木 誠一

一九九八年一月十六日午前八時頃、ゴルフ出発寸前に予期せざる事が突然我が身を襲う。洗面所の壁に身体ごと叩きつけられ、左半身麻痺でしばし呆然自失。一人で救急車を呼び緊急入院。脳梗塞と診断（右脳に血栓）。右半身は異常なし、幸い言語障害もなかった。腕を固定して二十四時間体制の点滴の十日連続。無気力に呆然とベッドに横たわるだけ。これからどうなっていくだろうか。果たしてなおるだろうか。不安の毎日。

握力左四十五からゼロまで低下。三週間後に松葉杖で退院。日常生活もままならず。約二年リハビリ生活変化なし。苦惱、あせりの連続。最悪右が使える大丈夫と開き直るしかない。脳梗塞の原因はゴルフの練習のやりすぎの疲労蓄積、水分不足、ストレスと考えられる。

ある日ふと小指と手のひらの間に小さな隙間を見つけ、この穴に箸を差し込み

放置順に大きくしてまた放置の繰り返し続けること二年やつと左指が開いたうれし涙が止まらないが次の瞬間、指に感覚なく動かない右手で左の指を一本根気よく曲げようと努力を重ね約一年で反応し始めやつと普通に折り曲げが出来た絶対動かなかった脇が偶然あくびすると勝手に上がり、終わると元に戻るわけがわからないどうして何故？医師もわからないというあくびした瞬間に脇に厚めのクッションをはさみこみ、そのまま生活を続けるうちにいつの間にか自力で上げ下ろし出来だした足も並行して回復とにかくうれしい数年後には左腕全体に少々違和感が残るが、視力も戻り外見ではほとんどわからないまで回復努力もさることながら運にも恵まれた感謝紆余曲折しながらゴルフしたい執念で、長い年月をかけ奇跡的に克服

二年前山下隆三君の手助けもあり苦節十年夢にまで見た待望のゴルフができたよく頑張ったと褒めてやりたい

松浦先生ご自宅で、よくここまで元気になったねと涙ぐんで何度も力強く握手してくれた昨年友人の見舞い時に細木病院のリハビリ室で偶然先生と再会

言葉と足は不自由ですが顔色も良くお元気そうまた私のネクタイを大変気に入られて何度も手に取り嬉しそうな顔が素敵このような笑顔を入院以来あまり見

たことないと奥様から感謝される 謹んでご冥福をお祈り申し上げます

左腕にいまでも多少後遺症が残るがお陰様でなんとか人並みの生活もでき、たまにはゴルフも楽しんでいたが今年正月早々突然に腰と太ももに強烈な痛みが長く続き、自力歩行困難のため一か月あまり入院 腰部脊柱管狭窄症 またまた試練が襲う 現在徐々に快方に向かうが、未だに歩行に不自由 だがくじけない 必ず人並みに歩くぞ ネバーギブアップだ 狭窄症、閉塞性動脈硬化症、慢性腎不全の持病で不安だが六十周年記念にはぜひ出席したい 過去をどう生きて来たかは問題ではない 今後どのように生きていくかが大切 助かった命を大切にし、生きていることに感謝し、何事も前向きに頑張ってきた。

※ ホールインワン 一九八三年高知ゴルフ月例杯

(同伴者 吉本功、山本禎一、大原敬司)

生き切る

壺坂 艶子

三鷹の森ジブリの近く杏林大学病院の第三病棟九階で暮れなずむ街の灯りを眺めながら私の今まで生きて来た人生、何だったのか考えています。

一昨年大腸ガンの手術を受け、昨年には甲状腺ガンの予告。ところが手術の予定が三十年来の病気糖尿病でH A 1 C（ヘモグロビンエーワンシー）が七・八もありこの年でこの数値で手術をすると死につながる何があってもおかしくないと言われ、杏林大学病院の医師をして三男に言われました。

今まで年の事など考えた事もなかったので驚き、やはり年は年かと反省し、それ以来八王子市のゴミ焼却炉の余熱利用のプールで一週間に四、五回、三十分で千百疔（二十五疔プールを四十四本）泳ぎやっとならぬとH A 1 Cを五・八まで下げて現在無事に手術が終了しました。

南に中央ハイウェイのあかり、この空の下街の灯りのもとそれぞれの人生を送っている人々何だか、いとおしく思えます。そして七十九年近くも生きて来た私の人生、道に迷った時もありましたが、楽しみもあり悲しみもありました。

ただ一生懸命で無我夢中に生きただけで生き切ったと言えるかどうか考えています。

年をとると云う事がどういうものなのか、その昔土佐中・高でお世話になった久保田伸雄先生が“おまさん、御主人の会社をチツクト手伝うよりヨ、出しゃばったらイカンぜよ”と言ってくださった言葉、チツクト手伝っているつもりが気がついたら銀行を始め税務署、法人会の女性部会、地域の役員、親会の社会貢献委員まで、技術畑一筋で地域とは一切つき合いない主人の代わりに私が出しゃばり、家内をやる予定がオットさんをやって四十四年つくづくよくやって来たなあと思えます。

いろいろな事、反省しながらもあと残りの人生 何事があるかわかりませんが、宿命のある限り有意義に生き切って行こうと考えています。

熱帯のバンコクから

大西 正一郎

九月の声を聞いて、日本は秋の気配が感じられる季節になったのではないでしょう。しかし、この七、八月は例年にならない猛暑だったようで日本のWEBニュースが、それも一度ならず、「熱中症で一日に千人を搬送」と伝えていて驚かされました。日本とは比較にならないほど強烈な日射の、ここ熱帯タイなのに熱中症患者が出たなんてニュースが耳に入ってこないのは不思議です。

ということ、改めて彼らの生活振りを観察してみますと、水を頻繁に飲むなということに気づきます。こちらの水道水は飲用としては問題なしとしませんので、飲料用には別途浄化された水を購入します。この数年でいたるところに開店されたコンビニエンス・ストアに駆け込めば、ペットボトル入りの冷たい飲料水を容易、かつ廉価で入手できます。ガラガラ太陽の昼下がりに、バンコクの町を歩けば小さなボトルを手にして歩く人々に大勢出会います。

熱帯で長く生活していると毛穴が開き切ってそこから常時汗が蒸発していく
そうで、こまめに水を補給してやらないと脱水状態に陥るといふことです。

そのせいか、こちらでは激しい運動でもしない限り日本のように汗が流れ出る、
滝のように汗が流れ落ちるといふ現象は起きません。テレビでサッカーの試合を
観戦していると流石に顔中汗だらけになって、試合途中で二度、三度の水分補給
の中断時間が設けられています。そして、選手にもレフリーにも一斉にボトル
が配られる風景が一年中見られるのは、やはり熱帯地方ならではのしょうか。

バンコクを走る電車も、ショッピング・モールも、車内や館内は例外なくガン
ガンに冷房されております。日本のクール・ビズなんて考え方はここでは微塵
もありません。それにしても、この冷たさも熱中症防止に効果があるのでしょ
うか。そんなことはないですよ。きつと “熱帯の人たちが単に冷気を、
いや寒気を楽しむため” というのが正解かもしれませぬ。しかし、温帯育ちの
老骨にはこの寒気は堪えます。薄手の上張りを常時携行して自衛に努めてお
ります。

大してお役にも立たないような情報を並べ立てましたが、来年の猛暑も、その
次の猛暑も乗り切って長生きしてください。

「フィネガンズ・ウェイク」といつまでも

浜田 龍夫

長年住んだ千葉県柏市から二年半前に高知市に移住し、かつて父が住んでいた二葉町の古屋を直して二年住み、半年前に高知市在住の一級建築士の大井さんに頼んで入明町に新居を建てた。

土地は家内が母親からもらったもので約百坪あり、家は柏の自宅を売却した分で建てた。家は二階にギャラリーを作ろうということで設計した。そして外壁に大きくALPという文字を入れた。

これは僕のジョイス出版の会社アピコ・リテラリー・プレスの頭文字でもあれば、「フィネガンズ・ウェイク」の HCFE の愛妻 ALP でもある。

もともと僕は農水省の筑波で畜産研究に定年まで従事してきたが、役人的に地位のあがることは望まず、論文を書くことにこだわってきたが、五十歳代になってもともと好きな文学志向にほだされ、当時柏市にきていたアメリカ人の口

ローレルさんから原文で小説を読むということで個人レッスンを受けた。

そして彼女がハワイ大学でフリッツ・セン教授から教わったジョイスの「ユリシーズ」を読み終えた。このパターンは僕が高校時代を通してアメリカから帰国した老人からミルの「自由論」や大学における詩と絵画の講義録を読んだことと同じで、僕の英語の力は 外国人の前で原書を読むことで培われたと思う。そしてローレルさんと一緒にALPからジョイスの「フィンガンズ・ウエイク」の研究誌を十年出し続けたが、最後はこの小説を自分でも読まないといけなくなり、この難事業にとりくんだ。

この小説は英米人の学生に読ませてもほとんど意味をとれないほどで、僕も当時出版された柳瀬氏の訳を見ても、結局何を書いているか部分的にしかわからなかった。こういう時は一番わかりやすいところから攻撃するのがよいと思ひ、ちやうど最後のALPの告白を英語でやさしく書き直した論文を見つけ、そこから原書をすべて日本語に翻訳することを始めた。

この時、この小説の最後にALPが絶望してリフィ川に身を投げて死んでいく場面があり、その英語の詩的な美しさに圧倒された。それがなかったら僕はこれほ

どこの小説に深入りしなかったろうと思う。

高知の二葉町での翻訳作業は後から思うと意外と速く進んだ。

このときは Tweet という全文注釈のソフトがインターネットで利用できたことで、それがなければ不可能だったと思う。昨年全部の翻訳を出版したが、自分でもそれを通して理解可能かどうか自信がなかった。それで今年の六月に原文の約三分の一を選んだバージェスの短縮版の翻訳を解説入りでつくり、「フィネガンズ・ウエイク読解」として出版した。

また自分で原文中のもっとも面白く詩的などころを翻訳した「フィネガンズ・ウエイクの詩的短縮版（仮名）」も作ろうと思っている。このように僕はやっとな小説を自分なりに理解し批評できる段階にきており、その基礎は僕のパソコンに全部の翻訳原稿を入れてあるせいである。

さいわいどこにいてもジョイスは有名で、この小説の名前も知られており、僕もこれからの老境の慰みとしてこの小説にかかわっていけることを幸せに思う。

「そこにコーラスがあるから」

広田 美和

昭和五十二年春、次女が中学生になった時私共家族は日野市に転居しまして、次女は丁度その年に設立された日野市立三沢中学校に入学しました。

それから三十五年後の今年春、中学生になった孫娘がその中学校に入学しました。生徒数増加により、校庭のそばに、新校舎が一棟増設されていました。

当時 隣接する小学校にコーラスの同好会のようなものがあつたそうで、そのお母さん達が中学校の音楽の先生にお願いをして、「メンバーが三十人以上集まれば」という返事を貰い、新顔の私にも声がかかって、待望の「三沢女性コーラス」が発足したのでした。

大宅先生は経験豊かな現役の先生でしたから、聞き慣れた童謡や歌唱曲などではなく、耳に新しい曲や、先生御自身が作曲されたものをよく教わりました。みずみずしい詩とピアノ、アルトとメゾとソプラノ三部のハーモニーの中にいる時が

何よりもホツとするひと時でした。

月 草

室生 犀星 作詞
大宅 寛 作曲

秋はしずかに手をあげ
秋はしずかに歩みくる
かれんなる月草の藍をうち分け
つめたきものをふりそそぐ
われは青草に座りて
かなたに白き君を見る

時無草

室生 犀星 作詞
磯部 徹 作曲

秋のひかりにみどりぐも
ときなし草は摘みたまふな

やさしく日南ひなたにのびゆくみどり

そのゆめもつめたく

ひかりは水のほとりにしづみたり

ともよ ひそかにみどりぐも

ときなし草はあはれふかければ

そのしろき指もふれたまふな

(詩は楽譜からでなく詩集から書きうつしました)

沼

山村 暮鳥 作詞

大宅 寛 作曲

やまのうえにふるきぬまあり

ぬまはいのれるひとのすがた

そのみずのしづかなる

そのみずにうつれるそらの

くもは かなしや

みずとりはそよふくかぜにおどろき

ほと しづみぬるみずのそこ

そらのくもこそゆらめける
あわれ いりひのかがやかに
みずとりは

かく うきつしずみつ

こころのごときぬまなれば
さみしきはなもにおうなれ

やまのうえにふるきぬまあり
そのみずのまぼろし
ただひとつなるみずとり

川

高野 喜久雄 作詞
高田 三郎 作曲

何故 さかのぼれないのか

何故 低い方へゆくほかはないか

よどむ淵 くるめく渦のいらだち

まこと 川は山にあこがれ
きりたつ峰にこがれるいのち

山にこがれて 石をみごもり
空にこがれて 魚をみごもる
さからう石は 山の形
さかのぼる魚は 空を耐える

だが やはり 下へ下へと
ゆくほかはない 川の流れ

おお 川は何か
川は何かと問うことを止める
わたしたちもまた

同じ石を 同じ魚を みごもるもの
川のこがれを こがれ生きるもの

古い楽符を紐解く時、詩と曲の融合というか、歌詞もすばらしいけれど、その詩に最もふさわしい（と思える）曲を作られる作曲家のセンスに驚嘆します。いつも感動しながら歌っていました、どの曲もそうですが。

そのメロディーをこの紙面に載せることが出来ないのは、片手落ちで、本当に残念です。

大宅先生は最初にコーラスの指導をして下さった先生だから、いろいろ思い出す曲がありますが、中でも忘れられないのは「すいかとお母さん」という曲です。私には、軍医として年若い妻と二人の幼な児（従妹弟）を残して、白木の箱になつて帰つて来た叔父がいるからです。

すいかとお母さん

緑川 ふみ 詩

岡田 京子 曲

むかし むかし

ふたむかし

小さな家がありました

小さな家には

小さな畑

トマトが三本

キュウリが二本

空にむかって

すいかのつる

毎朝水をやりました

草もきれいにとりました

水をやるのはお母さん

草をとるのは二人のこども

お父さんはるすでした

遠い南の暑い島

てっぼうもって戦争に

すいか すいか

早く大きくなあれ

うんとあまあくなあれ

パイパイ たいこはんどこ

お祭りの日にお母さん

待ってたすいかを切りました

二人のこどもはとびあがり

すいかをガブリと食べました

種まであわててのみこんだ

お母さんはやさしく見ているだけでした

なぜ食べないの お母さん

大好きなすいかでしょう

「神様どうかおねがいです

二人のこどものお父さんを

ぶじにかえしてくださるなら
一生すいかは食べません」

夏がすぎてまた夏がきて

お母さんはすいかを食べません

戦争がおわって三年たって

ああ やっとお父さんが帰ってきました

小さい箱になって

顔もなく

手もなく

背中もなく

また夏がきて

二十回もの夏がきて

お母さんはおばあさんになりました

日本中のお母さんが

ただおいのりをしたただけだから
お父さんは帰らなかつたの
だからねえ

おばちゃんは孫の春子に云いました
知恵とちからのたんとある
こどもたちがみんなして

戦争をおしだすのだよ

地球のそとへ

ヨイシヨ　ヨイシヨ　ヨイシヨ

地球のそとへ

小さな家がありました

小さな家には小さな畑

トマトが三本

キュウリが二本

すいかのつるも

やっぱり のびていました

秋の歌

クリンゲマン

作詞

メンデルスゾーン

作曲

吉田 秀和

訳詩

たのしき うたはきえゆき
はるすぎて ふゆはきぬ
かなしき しじまのうちに
よろこびは うつろう

ものみな しずもりて
うたごえも おさまりて
きぎのはも おつる
野にひとの かげきゆ

たのしき うたはきえゆき

あるはただ なげきよ

ゆめかや こいのおもい

春より はかなく

春より あまかりし

すぎゆかぬものは ただ

むねこがす あこがれぞ

たのしき うたはきえゆき

かなしき しじまのうち

よろこびは うつろう

あわれ いずこ うつろう

吉田秀和氏は優れた音楽評論家として定評がありますが、
こんなすばらしい訳詩をなさるとは。

ゆけわがそよ風

ハイネ

作詞

メンデルスゾーン

作曲

三浦 和夫

訳詩

ゆけわがそよ風

おもいをのせて

かるやかにはこべ

きみがみもとへ

かるやかにはこべ

きみがみもとへ

きみにおくるわがことば

きかずや

かぜのごと

あとをしたうを

またきみ

まどろみにおちたるときは

あらわれるそのゆめに

わがまぼろし

あらわれよまぼろし

ハイネ（詩）とメンデルスゾーン（曲）の名曲です。

（楽譜からの写しなので、殆ど平仮名です。二回以上の繰り返しは省略しました）

海を見たくない今は

寺島 尚彦 作詞

” ” 作曲

一・青葉ごしに海が見え

あの日も咲いていました

たちあおいの花

その海のはるかなむこうに

あなたはいました

美しい歌たちといつも一緒に

二． 青葉ごしに海が見え

あの日も咲いていました

たちあおいの花

新しい月日を夢に見て

あなたに会うため旅に出た

その朝をおぼえています

三． いくたびか春がすぎ

今年も咲いていました

たちあおいの花

けれどあの日とちがうのは

この広い浜辺にかぎりなく

うちよせる波のさびしさ

星の国はどんなですか

星の国にありますか海は
星の国で歌っていますか
今夜はすぐく海が静かで
思い出が海の上を渡ってくるきつと

その海のはるかなむこうに
あなたはもういない
だから だから
海を見たくない今は
今は海を見たくない
だから だから
海を見たくない今は
今は海を見たくない
あゝ あゝ

寺島尚彦氏は、沖縄戦の悲劇を歌った「さとうきび畑」の作詞作曲者として知られています。特に反戦詩人という作風ではないようです。

日のあたる坂道

ランゲ

作曲

南 安雄

編曲

海野洋司

作詞

一 日のあたる坂道にため息がひとつ
日のあたる坂道をころがってゆく

二 日のあたる坂道にただひとり立てば
止まらない止まらないかけめぐる夢

あの頃のわたしが走ってくる

赤い自転車と白いドレス

少女のほほえみ

日のあたる坂道のむこうは青空
なつかしい友達の名を呼んでみる

この坂のほかにはみんなもう

見なれないものばかり

人ごとのように過ぎた日

忘れた空の色

みんなすきですみんな

でもなぜか今ただひとり

誰かこのわたしを知っていますか

あの日の少女を

日のあたる坂道に咲いている花を

手にとれば目にしみるあの頃の色

風は歌うよ古びたあの歌

帰らない夢

ランゲの「花の歌」を編曲したものです。すばらしい曲と詩、情景が目には浮かびます。

。三十四年の歳月の間には、多くのすぐれた指導者と、数え切れないほどの合唱曲に出会いました。喜びや悲しみを共有してきた仲間も、高齢や家庭の事情などでコーラスを続けるのが困難になり、残り五名になって、遂に平成二十三年、解散となりました。

今年の春、コーラスの友人に誘われ、教室の見学に行ってみました。指導者は、

「日野市民合唱連盟」でよくお見かけする川妻干たでくに邦先生で、三十数人の混声四部合唱団です。そしてめぐり合ったのです。「水のうぶすな奥秩父」という曲に。

甲武信こぶしヶ岳だけの霧から生まれ落ちたひと雫が、泉となり沢となり、長瀨などの

景勝地を形成しながら、隅田川となって東京湾に注ぐという雄大な物語曲です。

（大倉芳郎作詞 池辺晋一郎作曲）

やっぱり、コーラスは止められません。

老春謳歌

宮地 春美

永い年月、夫と共に経営してきました会社を、夫の死を潮時と思い息子にバトンタッチしました。毎日出社はしながらも責任のない立場になって六年近くになり、その間少々の冒険と共に旅を楽しんでおります。

もう何年前になりますが、スイスで伊野部さんと二人トラムに乗って見知らぬ街に降り、目に付いたアインシュタインの資料館を覗きました。

日本の原爆はドイツ人がアメリカに持ちかけたとは聞いていましたが、その人がアインシュタインだったとはスイスで初めて知り、とても複雑な気持ちで資料館を後にした事でした。

パリではパリまで来たんだからオペラ座に行こうと取り難いチケットの手配をして頂いて伊野部さん、鍋島さんの三人でドレスアップをしてオペラを観劇した事も忘れがたい思い出です。

莊嚴な場内は勿論ですが、観客もそれなりにマツチした人達で私の日常生活からは掛け離れた一時でした。パリには再度来る事はあってもオペラ座にまた来れるだろうかと思ひ乍らストラヴィンスキーの放蕩息子を楽しんだ事でした。

家族と共に過ごしたハワイでの元日、娘と歩いたスペインや晩夏の利尻島、紅葉の京都、又楽しすぎて歌の詠めなかったバリ島等、旅は私に老春を思い切り楽しませてくれております。

常夏の島で迎えし元日を素足ですごすこれの気楽さ

お雑煮も数の子もなき元日の朝をテラスでコーヒーにする

日本の暗きニュースは聞こえず水平線の初日を拝む

ブランドの店たち並ぶ街なみをサンダルばきでふらっと覗く

ふと入りしアインシュタインの資料館相對理論をやさしく展示す
アメリカに原爆すすめし人と知り資料館いでて心重たし

(スイスベルン市)

犬つれし人等も乗り込む渡し舟早き流れのライン川渡る

対岸に古き聖堂のドーム見え昔ながらの渡し舟ゆく

アヌシー湖にかかる大きな虹の弧をくぐりてすすむ遊覧ボート

耀えるアルファンブラの宮殿を映して澄める庭園の池

日の落ちて灯り点せる宮殿の姿かけ莊嚴に闇夜に浮かぶ

夜更けなお灯り点せる宮殿を囲みて森の深き静もり

パリに住む友を頼りての個人旅親たき行きたきリストを持ちて

うす暗きパリへの道路の渋滞を通勤ラッシュと聞いておどろく

厚き絨毯敷きつめられし場内を案内されてわが席につく

開演の前の静もり天井を見上ぐれば一面シヤガールの絵（オペラ座）

紺青の澄む朝空にくつきりと長き裾曳き利尻山立つ

あざらしの棲みつく小さき湾の店に天然昆布を土産に求む

頂きの近くかすかに雪残す山を逞さに映す姫沼

あらかたの花季終どきわりはまなすの艶めく朱実あまに秋陽の沁ひむる

暮れなずむ海に利尻のシルエツト右手に見えつつ島遠ざかる

写経終え下り立つ庭の苔の上にこぼるる紅葉の彩あざらけし

手入れよき古刹の庭の秋深み陽にかがよえる朱のもみじ葉

灯り点す青澗院の夜の庭に映えて紅葉の朱の色深し

閑張の青不動明王のほの暗きみ堂の奥のすがたいかめし

秋深む古刹の庭の手入れよく紅葉ひまの間を滝の流るる

最近考える事

川田 孝徹

横から見たら、不安定な姿勢で、フラフラしながら歩いている自分が見える。何時チャガマツテも不思議はない様な情けない状態で、然し何とか背筋を伸ばして―と努力はしているのだが。山田風太郎さんの随筆「後千回の晩飯」が現実の物になってきたと思う昨今である。若すぎず、老いすぎず、丁度良い時と言うのは無いのかも知れないが、ダイヤモンド教授の、日本で子供に教えるベスト3の「他人に迷惑をかけるな」はアメリカでは20位にも入らないと言う言葉を救いに、その時まで迷惑をかけっ放しで行くしか無さそうである。

30年以上宝塚市に住んでいる。今、月に2回位のペースで南国市に草刈に通っている。本を読んだり、居眠りをしたり

の片道4時間は苦痛ではない。耕作放棄の田んぼは梔子に合
わないので人に頼み、家の周りの少しばかりの畑で草と格闘した
後のビールが美味い。

中高一緒であった川添晃氏、垣内節子氏には年に何回かお目
にかかれて心強い。

さて、長話や駄文は認知症の初期症状だと聞いている。器官
の衰えと前後して、感受性や興味を失くしていくという過程
を見事に辿っている事をご報告し、バタバタせずに現状を受け
入れたいと思いながら終わりとします。

後千回、どうぞいい晩飯を撮られん事を祈ります。

此の頃思う事、考える事

徳弘 公子

平成二十五年 癸巳年

元旦から穏やかな新年を迎えた。一月はお決まりの如く急ぎ足で過ぎ去ろうとしていた。その日明るいニュース、春の選抜高校野球に出場が決まった、二十年振りで母校土佐高校が選ばれた。当然無関心では居られないうれしい出来事である。幸せな気分で予定の行事をクリアーし一月は終わった。

二月四日は立春大吉、何か新しい事を試みてみたい、昨夜の豆まきは省略、成田山の豆まきは有名である。

三月三日、ひな祭り、この頃は耳の日で補聴器のお話に耳を傾けている。

四月此の月は、父方の叔母が親戚最後の長命を全うした。今、私自身も老いの坂を登りつゝ彼女の生き様に敬意を表したい。

五月三、四、五、六日大型連休、外出は控えておこう、休養、休養。

六月、瞬く間の半年、夏越祭、わぬけさま、各神社が茅の輪を立て、我々は大祓いに出掛け半年の無事に感謝し、暑さに負けない様に祈りを込めて、後の半年

を無事に過ごせるようお願いするのである。

七月、七夕さま、子供の頃はこの日が来ると、軒端に笹竹を二本立て、それに藁縄を張り渡して、茄子や鬼灯、糸や芋の葉に玉の露を包んで莊り、その露で墨を摺り筆を取って、字や針仕事などの上達を願って短冊を竹枝に吊るしたものであった。願望にはあれこれと欲しい物と、自分自身の高揚を希っての事柄とがあったのだが、これを伝える者が居ない淋しさを感じている。そして久しく中断したままである。今は幼稚園で幼児達のお願い事の星まつりとなっている、それはそれで微笑ましく可愛いものだ、こうして家々での年中行事の文化も少しづつ変化しつつある。

さて、七月は私の誕生月である。昨年両眼の手術を受けた、丁度一年を経過したが、細やかな点の改良は少ないが広い意味では以前より見えている、細字の読み書きは聊か不自由である。年を取れば機能も身体も衰えるのは当然の事、テレビ通販などで若返り美肌化粧品やサプリメントなど多種多様な商品の宣伝販売を行っているが、まあ程々にしておこう。

精神的にはむしろ年を重ねる毎に、内面の豊かさや奥深さを内蔵出来るのではと思う。老いは成熟であると誰かが云った事を思い出した。

八月、梅雨も明け本格的な夏となる。連日の猛暑に加え豪雨による災害も多く、厳しい事である。被害の少ない事を祈る。

ともあれ、よさこい祭りは開催六十周年で、高知最大の夏のイベントである。県内外の踊子隊が鳴子を振って踊っている時の笑顔、皆楽しそうで、生き生きと輝いている、見ている方も元気をもらえてうれしい。あのエネルギーと、ファイトは素晴らしい。こうして八月も終わろうとしている。

九月初めに私にとって大切な行事が待っている。まだまだ思う事は沢山あるが、まとまらない。もとより文章は苦手で、I女に押し切られてペンを取った次第なれど、八十歳を目前に我が身と対峙しながら日頃の雑感を日記から拾い書とした。

今後は九十歳を目標に誠実に自然体で寸陰を重ねて行けたらと細こまやかな希いを記して拙筆とする。

皆様方もどうかお元気で過ごして下さい。ご健勝を念じています。 合掌

出会いと再会

依岡 絢子

今年の夏は連日 猛暑、猛暑、高齢のせいかなと思っていたら異常気象だったという。日本列島いや地球は大丈夫だろうか。

同窓会に出席します。六十年ぶりに再会し感激の場面もありそうで楽しみです。

私は平成七年三月に四十年間勤めた小学校教員を定年退職しました。児童、保護者、同僚など、沢山の人の出会いがあり絆を結んできました。

退職して十八年目、銀幕シネマの場面は第二章に入り終末期に向かって歩いています。

夫も教員で、私より二年早く定年退職して書道一筋の道を歩いていて紫峰（夫の号）書道会の教室を開いていました。私は退職と同時にその教室に入れてもらいました。筆の友書道会へも入り十年位かかって師範をいただきました。年間五、六回書展へ出品します。作品づくりに追われています。今年は夫主催の第十一回

啐啄そったくの書展を 九月二十七日〜十月二日まで 高きました新画廊で開催します。
八月中旬に作品を表具店に出し案内状、作品集、展示プランなど準備できました。
大忙しだったので「くろしお」の原稿が遅れました。

高知県西南端に位置する幡多郡大月町へ嫁いで行き、最初に赴任した小学校が
平成二十一年三月に閉校しました。丁度私たちの結婚五十年の金婚の年でした。
夫は「閉校の碑」の文字を頼まれて書き立派な碑が出来ました。私たちは前庭の
一角に閉校と金婚の記念に歌碑を建てました。

潮騒と 野路菊の 群れに守られて
母校よ 永遠に 輝きてあれ

書 依岡 稔（紫峰）

歌 依岡 絢子

夫が私の短歌からこの一首を選んで筆で書いてくれました。生きて来た証です。
記念式典で還暦になった教え児十名と再会し幸せな日となりました。

さて、第二章のハイライト。それは思いがけない友との再会。一昨年、五十七

年ぶりに青嶋（旧姓坂本）武子さんが唐突に、「もう忘れているかも知れないけれど。」と東京から電話をくれました。受話器から流れてくる声は確かに武子さん。忘れてなんかいません。なつかしい声でした。よう電話をかけてくれました。二月九日の同窓会の日に再会することを約束しました。

さっそく同窓会名簿やアルバムを探しページをめくりました。運動会の仮装行列で武子さんがお宮、私が貫一、手をつないで運動場を一巡した写真、宇佐から巡航船へ乗り浦ノ内湾の風景を楽しみながら武子さんのお家へ行った時の写真など、コピーして私の家族の写真も入れて郵送しました。再会の日まで文通、電話で連絡をとり合いました。

二月九日レストラン「どんと」で再会しました。学生時代の面影があり一瞬に五十七年の空白の時間が埋まりました。昼食後、神田の拙宅へおいでもらって三泊四日の合宿が始まりました。

夕方から「ラ・ヴィルフランシュ」の同窓会へ行き二十名位の集いの中で歓談しました。拙宅へ帰り夜更けまで語り合いました。

二日目、伊野部（旧姓野田）敦子さんを誘って母校訪問、新校舎の説明を池上

校長にしてください。お茶室「向陽庵」へ入らしてもらいました。私たちの時は大嶋校長宅で奥様にお作法を教えていただいたことを思い出しました。

その後、土佐北原の野田旧邸、横浪の武子さんの実家、横浪スカイラインを通り中岡慎太郎像の側の入交さんのログハウスを見て萩の茶屋で貝を焼き磯の香を堪能して帰ってきました。

三日目は牧野植物園、新港、岡豊の垣内（旧姓森田）節子さん宅を奇襲訪問、長さ三十七センチ余の立派なお大根を一本づついただいて歴史民俗資料館で研修しました。

四日目は午後の飛行機で帰られるというので近くの粉もんやで昼食後、敦子さんに挨拶して空港へ。夕方七時半頃、着陸したと電話があり、ほっとしました。過密な日程で疲れたことでしょう。敦子さんもずっと一緒に三人は学生時代にかえって話に花を咲かせ、笑い、はしゃいで、楽しい三日間でした。

第二章に入って教え児や同僚との再会が次々とあり幸せをかみしめています。ゆっくりこつこつと書の道を歩き、今までに出会った人たちとの再会を期待しながら生きていきます。

出会い

森尾 富美子

「お待ちしてました」「先生お元気になられましたねえ」「思っていたよりなられていきますので安心しました」等、矢継ぎ早に笑顔で挨拶をしてくれました。

平成二十四年八月十一、二日 本山町立沢ヶ内小学校の教え子達との同窓会。続いて八月十四日に本山町立木能津小学校の子達との同窓会がありました。

この教え子達との出会いは、昭和三十年四月と三十三年四月でした。五十七年も前のことになります。

私は、高知大学教育学部乙類でしたので二十歳での教師でしたのに、それでも親子共々に「先生」と呼んでいただき慕ってくれたことに感謝しています。

昨年の木能津小学校の同窓会では、私の喜寿の祝いを兼ねて計画したそうです。私は同窓会として参加したので、喜寿のお祝いの記念品を贈られた時には驚きましたが、子ども達の気持ち素直に受け取りました。

喜寿の件については、S君のお母さんがアドバイスされたそうです。

半世紀以上過ぎているのによく私の年齢を記憶して下さったものだと思います。

同窓会の場所は、S君が九年かけて新築したログハウスにてでした。所有している山から丸太を切り出し、設計図、大工は色々と研究して自力で取り組み完成したようです。

大黒柱を両手で抱きかかえましたが、指先は届かず「すごい」の一言でした。毎年の年賀状には、途中の建築の様子が印刷されていたので仕上がるのを楽しみにしていました。

家のテラスには、大きなバーベキューの窯が設営されていて、上部は藤の木で覆われていて涼しく、みんな大切れの肉等を焼いて美味しくいただきました。

お母さんは赤飯を炊いて下さり子ども達へのおみやげにもしていました。お母さん、子等の優しさ、思いやりに心が打たれました。

実は昨年一月二十日～三月四日までの四十五日、医療センターに入院していましたので同窓会に出席できるか心配でした。とにかく教え子達に会いたい一念でリハビリに励み、やっと参加することが出来たのでした。

今年の同窓会は、去年T君が「今新築しゆうので見に来てよ」と言ったことから計画されました。

「去年よりはすごく元気になりましたねえ」と喜んでくれました。部屋に入ると壁には、感謝状、表彰状等が掛けてあり土建業の社長として地域発展のために活躍していることが理解できました。

長野、東京、大阪等から今年も参加して思い出話に花が咲いていました。

私はお礼に「清夜の吟」を吟詠しました。

お開きの時間が迫っていたので、R子さんの娘さんの諏訪ナンバーの車が到着しR子さんを見送りました。その時「ありがとう」という気持ちで胸が熱くなりいつの間にか頬を伝わるものを感じました。

私も帰路につこうとすると「先生元気でいてね、又お会いしましょう」とみんなが笑顔で声をかけてくれました。

次回の同窓会にも参加できるように健康第一で過ごしたいと思っています。皆様のご健康とご多幸を心より祈念します。

近況報告（卓球とボウリング漬けの日々）

村山 静子

○ 母の介護で中座していた卓球に又戻って十年程たちます。旅行とか特別な用がない限り月曜日と木曜日の午後と土曜日の午前中は卓球にいそいそと出掛けています。所属は車で五分のところの黄檗体育館の中の源氏卓研です。体育館は市の施設なので冷暖房はなく（隣の小部屋が冷房付きの避難所になっています）真夏は汗がしたゝります。

会員は六十名位、毎回出席人数四、五十名、男女ほゞ半々でシングルス、ダブルスに黄色い声を出しながらも真剣です。希望者にはコーチが順番に強化したいところを特訓してくれますし、初心者には基礎から教えてくれます。

今のところ足腰が痛くなる事もなく一時から四時迄若い？人達と変わりなく頑張っていますが、若い人が疲れた、疲れた！と休憩しているのを見ると自分の体は大丈夫かなと少々不安です。主治医の先生に余り疲れないんですが、年を取

ると疲れても感じなくなるといふ事ありますかと尋ねると、本当に疲れたら動けませんから動ける内はどんどんやって下さいと励まされました。

安心したようなまだ少し不安のような…：年甲斐もなく頑張り過ぎてある日突然！！という事態が頭をよぎりますが。でもやり出したら止まらない！

年令は恐らく私が最高齢だと思えます。会話の中で私はもう七十だから…なんて言われると返答にとまどってしまいます。まだ年令を自慢出来る程達観出来ないし年令扱いされて手加減されるのも嫌なので、だから年令は内緒！

でも八十を目前に八十の大台は精神的にきつい、尻込みしてしまう。

○ もう一つ一年半前から月曜日・木曜日の午前中（月・木は午前中ボウリング午後卓球と忙しい）シニアのボウリング同好会「華齢会」（加齢会とよく間違えて笑われますが）に卓球の仲間と入会し楽しんでいきます。

始めた時からとに角 美しいフォームでを合い言葉に（自分のスタイルもかえりみず）年を忘れて腕を振り上げています。

まだまだスコアは満足出来るものではありませんが、たまにはツキが味方してドキドキのスコアになることもあり、興奮あり落胆ありで止められないボウリン

グに今はまっています。

○ 休息の日

最近テレビの倍返しのドラマに刺激されて池井戸潤さんにはまり、五、六冊立て続けに読んでしまいました。男の人って大へん！

○ 去年オーストラリアのゴールドコーストに旅行し、卓球の交流試合を楽しんできました。

思いつくまま

安部 弥太郎

「くろしお」編集委員の公文さん、前田さん、川村愿さん達が早々と原稿を書いて電子版に載せておられるので、私も何か書かなくてはと考えあぐねているところです。

いくら考えてみてもぜひ書きたい、皆さんに読んでもらいたいとか、お知らせしたい：なんていうものがなく編集委員だから仕方なく書く……というような感じで、これでは読む方も斜め読みでせいぜいあの人なんか書いてはったなあ的なことになってしまふなあ。といって、今更書きませんではさんざん寄稿を呼びかけ寄付までお願いしておきながら協力してもらった同期諸君に顔向けできないことになるなあと思ひ悩んでいるところです。

大阪で生まれてからずっと大阪、京都で暮らしていました。高知に來たのは転勤族の父親に連れられて土佐中学一年の二学期に編入した時で、それ以来土佐高

を卒業するまでの六年間を高知で過ごしました。

大方の同期諸君と違うところは高校卒業後は再び父親の転勤で関西に戻った、高知に根をおろしていない根無し草のような存在だということで、その辺が少し引け目を感じるというか、高知に疎遠になるところですが、多感な時代を土佐中高で送れた事は大変幸せだったと思っています。

高知に来る前は疎開先の大阪河内の田舎で西瓜泥棒や盗み食い、果ては悪ふざけで女友達を押し倒すなど悪童の限りを尽くし、土佐中編入当時も粋がって油を塗った帽子を被って登校し、生意気な奴だとみんなの鬻鬻を買いました。

それが文武両面で良い友達に囲まれていたうちに徐々に人が変わったようにまともになつた？気がします。

碌に勉強もしないで秀才が集まっている土佐中へやって来たので父から「みんなに負けないよう自信を持って励め」とハッパをかけられ頑張つて勉強しました。苦手な数学は公文公先生宅にお邪魔をして特訓を受けたりもしました。

所詮はガリ勉の点取り虫でしたが、成績は人並みに良くなりました。

チビのくせにバスケットボールにも精を出しましたが、何が楽しかったかと言えば今は亡き島崎博之君の映画館セントラルでよく映画を見た事、西山五朗さん

宅の広い庭で横山隆夫君、大西正一郎君らと洋弓に興じた事、固有名詞は出てきませんが、前田典彦さんに連れられて久松憲二さん達と一緒に谷川の溪流で水中眼鏡を覗きながらモリで川えびを獲ったり、テントを張って飯盒炊飯をしたりした事など：今も懐かしい思い出として残っています。土佐での生活は私にとって大きな節目であり、良き師と友に恵まれた六年間は大きな財産になったと感謝しております。

同窓会 名前出ないが盛り上がる

前後の脈絡は全然ありませんが、地域のシニアクラブを通じて年寄り仲間と交流を始めてからもう十年以上になります。

最近逝く人が目立ってきてきて会員数は九十世帯百二十九名に減りましたが、それでも町田市では有数の大きな老人クラブです。上は大正生まれから下は還暦前後まで、いつまでも元気に人生をエンジョイしたいと活発に活動しています。

今年五月～六月の手帳を見るとこんな具合です。

(五月二日)新緑を求めて近郊の旧白州邸までハイキング。十五名。一万二千歩。

(五月六日)週一の麻雀。二卓八名。

(五月八日)週一のグラウンド・ゴルフ。十二名。

(五月九日)月二回のハイキング。玉川上水沿いを歩く。一万六千歩。二十六名。

(五月十日)年二回の映画鑑賞会。「リンカーン」を鑑賞。十九名。

(五月十四日)ハイキング十五周年記念に十月の高尾山集中登山を決める。

(五月十五日)月一の食事会。百九回続けようと、つけた名前が「百九会」。

この日は横浜でステーキ料理。十三名。

(五月二十一日)シニアクラブ会報を印刷、配布。編集責任者として年六回発行。

(五月二十三日)月一のカラオケ。二十九名。

(五月二十五日)第十回甲州街道ハイキング。二十八名。

この日で九十六キロを完歩。

(六月六日)富士山満喫の日帰りバス旅行。三十四名。

(六月九日)シニアクラブ会員の集い。四十一名参加。

飲み食いしながらビンゴゲーム、カラオケに興じる。

シニア・シルバー世代の仲間は戦争を挟んで生まれ、経済の復興期やオイルショック等の時代に家庭の内外で苦勞し同じ時代を同じ価値観で同じような哀歎をもって生き「あれよ！あの人よ、分かるでしょう！？」と他の時代の人には通じない、固有名詞を使わないで通じる同じ時代の仲間、そのあとシニアクラブでも

同じ人生を味わっている仲間になった。

地域に集まったそんな仲間はこちらも同窓生、クラブは同窓会と言えるでしょう。結構楽しいです。同窓会だから強いて発展は目指さなくても良いだろう、同窓生が三人になるまで続けようという意思があればよい！そんなつもりでこれからも楽しく付き合つて残りの人生をエンジョイしたいと思っています。

一つの事を書くとき大体このくらいで終わってしまいこれではまだ足らんかなあ次は何にすることになってしまいます。

我々の年代になると体のことは先行きわかりませんが、最近「医者に殺されない47の心得」という本がよく読まれているというので買って読んでみたら面白い。要するに「医者を簡単に信じてはいけない。医療や薬を遠ざけ元気に長生きする方法を考えよう」というのです。

一九九五年（平成七年）に大腸ガンの摘出手術を受けてから十八年、再発することなく元気に過ごしていられるのは名医と近代医学の進歩のお陰です。

またご多分に漏れず随分前から降圧剤や脂質、尿酸値を下げる薬などの厄介になっていきます。要は病院、薬の世話になるかどうかは安心とリスクの兼ね合いなんでしょう。

今年五月孫娘に女の子が生まれ「ひい爺さん」になりました。複雑な心境ですが、曾孫の成人姿を見るためにも百歳まで頑張ろうと言ってみんなに笑われています。そのためにも今は調べようと思えば書籍でもインターネットでも情報が手に入る時代です。「病気のことには医者にお任せ」ではなく「医者を疑い自分で調べて考える」癖を身につけて命を縮めるようなことは避ける必要があるのかも知れません。

ほんまにしょうむないこと書いてるなあー…自分でも気が引けますのでこの辺で勘弁させてもらいます。

